

## 第2回三重県経営戦略会議概要

1. 日 時：平成 23 年 8 月 20 日（土）13:00～16:00
2. 場 所：ホテルグリーンパーク津 6 階・葵・橘の間
3. 出席者：奥田委員、白波瀬委員、田中委員、西村委員、速水委員（座長）、宮崎委員、鈴木知事
4. 議題：
  - (1) 若者（30 歳代まで）や女性が個性を発揮して活躍できる社会に向けて
  - (2) グローバル化の中での人づくり（教育）、地域づくり

### はじめに

#### 鈴木知事：

前回の第 1 回会議においては「多様性」が一つのキーワードであった。今回のテーマとした「若者」や「女性」を、これまでの価値観で捉えることは難しい。したがって、行政としても、今まで通りの価値観に基づく政策だけを行っていても、十分な対応ができなくなるのではないかという懸念がある。

今回の 2 つの議題は、まさにこのままでは行政として十分に対応できないことが予想されるテーマとして設定した。幅広い視点からご意見を賜りたい。

### 議題 1. 若者（30 歳代まで）や女性が個性を発揮して活躍できる社会に向けて

#### 宮崎委員：

若い人が、「県内に留まっていること」と、「県内に留まっていないこと」のどちらがいいのか悩ましいところである。昔は、三男、四男になると親が面倒を見てくれないので、自分から外に出ていかざるを得なかった。しかし、今は、少子化の影響により、若い人が外へ出て行かなくなっている。当社においても、当社に入社すれば転勤がないだろうという理由で入社してくる若者が増えてきている。これは親の意向が影響している面もある。

三重大学で経営協議会の委員をしていたが、簿記や TOEIC の専門学校に通う学生が増えているとのことであった。企業としては、総合的に力のある人材を求めているのであって、そうした資格を求めている訳ではないが、大学の一部の先生方には、時代が変わってきているにもかかわらず、就職には資格が必要などと、従来の考え方を引きずっている方が多い。

若者については、今の若者は成功体験が少ないと感じる。これは、例えば企業においては、若者を従来のヒエラルキーの中に閉じ込めようとし、若者

が活躍する機会をなくしていることも原因の一つにあげられる。当社で、以前、20人の営業マンを、人脈や日本におけるヒエラルキーが通用しないロンドンで営業を行わせたら、若者たちの方が熱心さ、ひたむきさが評価されてベテラン営業マンよりも良い営業成績を残した。このようなことから、若者には活躍できる場の提供が必要であると考えます。

また、職場の中には男性にしかできない仕事もあるが、ビジネスの方法も変化しており、女性も活躍できる場面が増えている。例えば、酒類業では従来の酒屋に加え、大手量販店との取引が増えている。大手量販店では女性が比較的多くお酒を買っていることもあり、当社においても大手量販店との関係では総合職の女性が活躍している。やはり、女性が活躍できる場の確保が必要である。

#### **西村委員：**

三重県出身者は、三重県を潜在的に好きであると思っている人が多いのではないかと。三重県人は、おとなしい人が多いが、世の中に役立とうと思っている人が多い。しかし、それが三重県の中では実現できないと思っている人が多い。したがって、外に出て行って自己実現しようとしているのではないかと。本来、外に出ていかずとも、三重県で自己実現できるように、両者が一致することが望ましい。

私自身、外から三重県に帰ってきて、三重県の中には、非常に魅力的な経営者がたくさんいるということが分かり、三重県でも自己実現できるのではないかなと思うようになってきている。今思えば、自分は、高校生の時に自分の地域のことを知らなすぎた反省がある。

このようなことから、今、高校生セミナーと称して、主に県南地域の高校生を集めて、地元企業の経営者とディスカッションする機会を設けることに取り組んでいる。外に出ていくにしても、地域のことを理解して外へ出ていくのと、そうしないで出ていくのとでは、将来の自己実現と三重県とのつながりのところで大きな差が出てくる。また、女性についても、女子高校生を対象とした同様のセミナーを設ける予定である。県南地域では依然として男女の固定概念があり、女性の活躍できる場が限られている。

これ以外にも、三重大学においては、地域のことをもっと良く知ってもらおうという意図で、地域イノベーション学研究科を設置した。学生もそうであるが、やはり、教える側も、本当に地域の企業のことを理解して、社会の変化を意識していく必要がある。

#### **田中委員：**

今のようにインターネット等が発達する前、若者も情報が限られていて、親や周囲の大人からしか情報を得られず、結果的に外の世界を見てみたいと、手さぐりで外に出ていくケースが多かった。しかし、最近では、若者がインターネット等からの情報により、地域の中でも活躍できる場所が見つけられ、地元志向になってきているように感じている。若者がやりたいことが、地域の中でできる状態になりつつある。このようなことをさらに充実させていく

には、地域のコミュニティにおけるタテ、ヨコ、ナナメの関係を充実させ、大人、先輩に話を聞く機会を増やすことが必要である。そうすれば、若者の世界観が広がり、多様な情報を得た上で自分の軸を持つことができ、若者の自信になるのではないか。また、若者が新しい事業を起こすためには、知識やスキルを身につける教育が必要である。

女性の活躍に関しては、やはり衣食住に関する問題の解消が重要となる。自立できる仕事を持っていないと、女性が自分だけの力で何とかしようとしても、現実的には難しい。今後少子高齢化が進むと、町も高齢化しているところとそうでないところが点在し、子育て等を勘案すると、地域のコミュニティで手助けする必要がある。その意味で、二世帯、三世帯住宅に補助金を出して政策的に促進させてはどうか。女性が子育て等を特段負担に思わないような、自然体の地域コミュニティが必要であり、それを作るには行政の支援が必要である。

以上、一言でいうと、おじいさん、おばあさんも含めて、居場所と出番のある社会が重要である。

#### **白波瀬委員：**

三重県内部と三重県の外からの人の行き来を盛んにするような工夫ができないものか。たくさんの人に三重県に来てもらい、また、留まってもらうことが必要である。例えば、一旦三重県の外に出て行った若者に戻ってこようと思わせるインセンティブをどう付与するかを考えることも大切ではなからうか。それにはまず、仕事の機会、場を提供することが重要であり、三重県として県内での就職支援をどのように積極的に行っていくかが課題である。

豊かな生き方、自分らしい生き方というのは、いろんな場合があって、それを見つけるのに時間がかかる者もいる。若者の中には、やっても、やっても何が自分にとってよいのかうまく見つけられないという者もいる。そのような若者を待ってあげられる社会をどのようにつくっていくかという視点も大切である。

女性の働き方に関しては、サクセスストーリーだけでなく、自分もひょっとしてやれるんじゃないかと思えるような身近な事例も含めて、様々な立場の人から話を聞く機会を提供することが重要ではなからうか。

#### **奥田委員：**

今日の資料をみて、50年前と三重県は変わっていないと感じた。具体的には、三重県人は尖っていないくて、ある意味コンサバティブである。物事を動かす、移動させることに関心がない。三重県は刺激がない一方、住みやすいところである。自分自身は尖っており、学校教育の場において、若い人を刺激するような人が少なかったため、外に出ていった。そのことが、今の自分の行動の原動力になっている。三重県は静態的な県であるが、私は三重県人がもう少し尖った人間になって欲しいと思っており、そのためには、高校、大学における意識付けが必要である。

今の日本は、明治維新、第二次世界大戦での敗戦に次ぐ第三の分水嶺に立

たされている。これからの時代を見通すためには、IT化によって、①ライフスタイルが変わってくる、②価値観が変わってくる、ということを知っている人たちが見通していく必要がある。世界で起きていること、日本で起きていること、三重県で起きていることなどを意識付けし、若者の士気を高める必要がある。

ちなみに、愛知県もそうであるが、三重県は、県を舞台にした歌が作られない県である。作詞家に聞くと、情緒がない、文化がないなどの理由が返ってくる。やはり魅力のある県にすることによって、外に出て行っている人もまた戻ってくるのではないか。

あと、観光の視点で捉えると、県南地域のインフラ状況が悪いので、県南地域の開発についてもう少し考えていく必要がある。

#### **鈴木知事：**

自身が前職でジョブカフェを立ち上げた経験や、大学の講師として若者と接してきた肌感覚で言うと、今の若者は、情報に触れる機会が増えた分、その情報を見て結論を予測してしまい、リアルな体験をせずに挑戦しなかったり、あきらめてしまっているように感じる。

したがって、たくさんの情報を取捨選択するとともに、リアリティのある経験をしていく必要があると思う。

#### **速水委員（座長）：**

若者は、物語をつくるスタート段階にあると思っている。きっかけをつけてあげることが必要で、思いが完結するまでの不安をどう和らげてあげられるかが課題である。

一方で、特別に頑張っている人を認めていくことが必要である。

女性に対しては、例えば、子育ての不安について徹底的にその不安、ハンディを取り除く、そういう政策があっても良いのではないだろうか。そうすることによって女性が活躍するきっかけになる。

#### **奥田委員：**

女性の活用、少子高齢化問題は重大な課題である。これからの日本は、①女性へのチャンス、②老人が働けること、そして、③移民の力を借りること、が必要となってくる。

移民を通じて海外の人の知恵を取り入れることは、どこの国でも行っている。この際に、3Kの現場を移民の方に任せるといような発想ではなく、同化させていくような発想も必要である。このような同化のモデルを三重県や、大企業の中でつくることができなかと考える。

#### **宮崎委員：**

三重県に留学生が1千人ほど来ているが、ほとんど三重県内に就職していない。こうした留学生を雇用した企業に補助金を交付するなどして、県内に留まらせるようにしてはどうか。

**西村委員：**

三重大大学の留学生の中には、工学系では日本の企業に就職するケースもある。普段学生と接していて、日本の若者は変化を怖がる傾向がある。

この背景には、教育が学生にリアリティを提供できていないという問題があると感じている。今や、世界中の人々と普通に接することが普通な時代になっているにもかかわらず、教育の中で、社会に役立つという視点が欠けていたり、学会発表のための教育であったりしているので、大学院生を大学に引きこもらせてしまっている。

**奥田委員：**

外国人と接するためには、英語が必要である。G7やG20などの国際舞台において、英語でディスカッションできる日本人が今後必要であり、この点が韓国や中国から大きく遅れている点である。

幼児教育から英語でディベートができるぐらいの教育が必要である。世界の中の日本であるためには、十分な知識と経験に加えて、世界共通の言語である英語が必要である。

**白波瀬委員：**

今まで議論を聞いていると、リーダー層を軸とした教育に傾いているように感じる。また、外国語に関して言えば、英語以外にも他のアジアの言語も必要となってくるのではないだろうか。

移民に関して言えば、日常生活の中で、多言語で接していく必要があり、そうしたインフラもない時に、移民を受け入れても上滑りになるだけである。また、その際、これが日本人たるものであることをことさら強調するのは危険である。多文化共生の中で、自然と日本人の良さが出てくることが望ましい。

**鈴木知事：**

今、県内の大学で、「みえの現場すごいやんかトーク・大学編」というものを行っているが、学校教育の中で正解を出す癖が抜けず、世の中の物事にほとんど正解がないにもかかわらず、若者はどうしても正解を探してしまっている、ということ強く感じる。結論ではなくて、探すこと自体も認めることも必要である。また、つながりが希薄化している一方で、自分と同じ年齢の集団など、同じカテゴリーからの脱落に対する恐怖を若者は持っているとも感じている。

奥田委員に触れていただいた観光についていうと、日本の宿泊プランは1泊2食付きのパックが主流になっているが、外国人は夕食場所をじっくり吟味し選択するので、訪れる外国人のニーズに合っているとは言い難いことを、課題として認識していく必要がある。

## 議題 2. グローバル化の中での人づくり（教育）、地域づくり

### 奥田委員：

当社の製造現場において、体育会系の高校卒の女性を配置したことがあったが、腱鞘炎などになったりしてなかなか定着しない。アメリカでは工場現場にたくさんの女性が活躍しているが、アメリカの女性の握力は、日本の男性よりも強いという肉体的な強さがあるということも影響している。

女性の労働に関して考えると、当社でも課長まではたくさんおり、係長までは男性を凌駕するような状況であるが、次長、部長級になると、様々な調整や付き合いが必要となることもあり、女性はわずかとなってしまふ。その意味で、女性は、子育て等をしながらでも働きやすい職種で活躍していくことが望ましいのではないかと考える。

あと、高齢者は、今後若者のお世話になるわけであるから、わがままは慎むべきと考える。

### 白波瀬委員：

個人差は確かにあるが、社会の中で、役職者などの男女の比率をフィフティ・フィフティにし、意思決定の場に多様な人が参加する環境整備が大切だと考える。

グローバル化の中で日本人が競争相手と伍して勝ち得ていくためには、グラスシーリング（注：女性がキャリアアップを目指す時、条件は整っているように見えて、その実これを阻む見えない天井のこと。）などを越えて、男女年齢を問わず、働く意欲を引き出していくような人材育成が必要である。

### 田中委員：

今の若者はインターネットで簡単に情報に触れられるためか、あらゆることに意識がフラットで欧米へのあこがれも少ない。これからは経済だけでなく文化等を含めて、Think globally, Act locally（世界規模でものを考え、身近な地域から活動する。）というニュートラル状態の中で、どう活躍するかが問われている。

一方で、インターネットなどを通じて、いろいろ情報を収集しているように見えるが、結局は自分からプッシュ型（一度設定すると、データの送受信がないときを見計らって、自動的にニュースなどが送られてくること。）の情報行動をしていて、どんどん興味の範囲を狭めている側面もある。特に若者に必要なのは、自分の範囲や興味を超えたまだ見ぬ情報のようなもの。よって、興味を示していない人に振り向いてもらう仕掛けが必要となってくる。

自治体は住んでいる人の満足度を高めることが重要で、行政はマクロ的にならざるを得ないが、消費者側、生活者側からみると、コミュニティ単位でまちづくりを見直すことができれば理想的である。小さいことで良いので、世代を越えて参加する機会の提供が大事である。

**西村委員：**

最近の若者は、戦後の追いつき追い越せのような明確な目標が持てないでいる。しかし、社会の役に立ちたいと思っている若者が多く、何か目標を見つけたら、積極的に行動する若者が多い。これを阻むものは保護者の固定概念であり、良い大学に入り、良い会社に就職するというような固定概念である。

欧米では、自己責任の考えの下、何をやっても良いという発想があるが、日本では皆と同じことをやっていないと脱落してしまうという漠然とした不安がある。グローバル化の中で、若者が活躍していくには、そのような不安を取り除くことが必要である。

**宮崎委員：**

グローバル化について述べると、例えば、企業の採用を4月採用から通年採用にして、外国人留学生をミックス採用することは、中小企業にとっては一朝一夕にはできないが、そのようなことが必要な時代になってきている。

また、グローバル化の中では、ローカルも重要であり、自国や自分の地域を良く知り、外国人相手にきちんと説明できるようにならないと、真のグローバルな人材にはなれないので、学校教育の中で、このような視点を取り入れていくことが求められる。

さらに、グローバル化の中では、マーケティングが重要であり、例えば日本で10%のシェアを取ることは非常に難しいが、中国で1%のシェアを獲得しようという発想に切り替えることこそ、本当のグローバルな視点でのものの考え方である。

**鈴木知事：**

若者は外形的なところで捉えてしまい、一歩外に出ていくことが弱いのではないかと感じる。

**速水委員（座長）：**

日本が、内向きになっていることに危機感を持っている。もう一度、グローバル化とはどういうことかを考えてはどうか。

リーマンショック以降、外国人が減ったが、今こそ地域の中で外国人と共生できる仕組みをきっちりと作るチャンスである。また外国人が増えた場合には、その仕組みを大きくすれば良い。

また、若者が海外へ行く機会を増やすことが必要であり、一方で、海外からきている人たちには、言葉のサービスや看板のサービスなどをもっと簡単にリーズナブルに提供できないか、検討する必要がある。

**奥田委員：**

グローバル化の中で、ものづくりにおいては、産地産消という考え方が最近言われてきている。すなわち、人もモノも一つの国で賄うということであ

る。これは、日本の雇用問題にもつながりかねない考え方だが、逆に言うと糸川英夫氏の著書『逆転の発想』ではないが、国際人として通用する教育が必要である。

**田中委員：**

外資系の企業誘致に際しても、ハード面のインフラだけでなく、例えば三重県には伊勢商人という有名な商人の発祥地であるという歴史があり、それは強みであるので、そうしたスピリッツやストーリーを発信すると、グローバルの関心が高まると考える。

また、若者の教育と連動して、大人も学び続けることが大切だ。東京の杉並区では、自分を磨き、社会とのつながりを見つける「すぎなみ大人塾」という取組を行っている。三重県においても、このような三重県人の心に火がつく取り組みができるとよい。

**白波瀬委員：**

今回の震災では、つながることのデメリットも認識された。第1回会議の東京会場の議論の中で、活動単位自体をコンパクトにしていくことの重要性が指摘されたが、この点を改めて指摘したい。

若者の内向きの姿勢を外向きに変えるためには、できるだけ複線的な教育ができないかも模索する必要がある。今は教育と就職のつながりが非常に悪い。MBA（経営管理学修士号）を取得しても、日本の賃金体系の中では何も変わらない。外に出ることや様々な経験を積んだことのメリットを、実際のキャリア形成の中に組み込んで、インセンティブをどう確保するかが重要である。

**西村委員：**

グローバル化の中で、日本においては、上の方のいわゆる良くできる人たちを伸ばすことの限界を感じる。博士号を取得しても日本では活動の場がないので、その場を海外に求めたまま、今も帰れない研究者が数千人単位で世界中に散らばっている。これらの人たちをどう日本に戻すかという視点も重要である。途中で積極的に採用してくることも一案である。

また、県南地域では現在、漁師、農業専業だけでは食べていけない。したがって、パートタイムで複数の仕事を組み合わせて、漁師や農業をしない時間には他の仕事ができるように、仕事と時間を自由に選択し、足し算で生きていくような暮らし方を認めていくことも、今後の県南地域における地域づくりの選択肢にあっても良いと考える。

以上